

第1室

(1) 15:30 ~ 16:00 (2) 16:10 ~ 16:40
(3) 16:50 ~ 17:20 (4) 17:30 ~ 18:00

第1室(1)

英語教員の同僚性を高める Collegial School Culture の構築に向けて

米崎 里 (関西学院大学)・西山 哲郎 (静岡聖光学院中学校・高等学校)
中村 光揮 (静岡聖光学院中学校・高等学校)・渥美 行規 (静岡聖光学院中学校・高等学校)
安齋 雄輝 (静岡聖光学院中学校・高等学校)・小山 洋平 (静岡聖光学院中学校・高等学校)
鈴木 洋介 (静岡聖光学院中学校・高等学校)・米山 利寛 (静岡聖光学院中学校・高等学校)

昨今、社会環境の急速な変化とともに、学校を取り巻く環境の変化など学校が抱える課題は複雑化・多様化し、各教員の業務量も増え、授業実践の情報交換をすることさえ難しくなっているのが現状である。しかしながら、このような状況であるからこそ、教員同士が互いに支え合い、指導や専門性を高め合ういわゆる同僚性 (collegiality) または同僚間協力 (collegial cooperation) の構築が重要視される。これまでの先行研究で同僚性は、(1) 教員の専門性の向上、(2) 教員の成長や認知、(3) 学校や組織の質の向上、(4) 児童・生徒の行動・態度・成績等への影響をもたらすと報告されている。しかしながら、同僚性の重要性を認識しているものの、教員の多忙化や教員間の意思統一不足等の課題が阻害要因となることが多い。本発表では、教員の授業改革を発端にして、どのような取り組みを経て同僚性を高めることができたのかを私立中学校の事例報告を行う。また同時に学校全体として同僚性の文化 (Collegial School Culture) 構築に向けての要素をまとめたい。

第1室(2)

学び続ける教員のための研修のあり方とは：オンライン研修参加者の視点に基づく英語教育研修の可能性

稲葉 英彦 (静岡教育事務所)

本研究は、英語教育に関する研修において、集合型研修とオンライン研修を参加者の視点で比較し、参加者の気付きや学びに関する記述を基に、英語教育研修の在り方について、新たな可能性を見出すものである。

本研究の過程では、中学校英語科教員及び小学校において外国語教育を推進する教員を対象に、学習評価と授業改善を目的とした2種類の研修を行い、研修後アンケートの記述を経年的に考察した。各校悉皆とした研修Aでは、学習評価と授業づくりに関する講義と単元終末の言語活動をつくる演習を織り交ぜた。研修Bでは、各地区から推薦された教員が、英語教育推進リーダーの授業動画を視聴し、参加者同士が気付きや考えを自由に共有し、子供の思考を大切にされた授業過

程について理解を深めた。研修A、Bともに、令和元年度及び2年度には集合型、令和3年度にはオンラインで実施した。

両研修では、参加者が協議を重ね、互いの授業観や英語観、子供観を磨くという本質的な目的を変えず、参加者同士の意見交換を一貫して行った。その結果、抜本的な授業改善に関する気付きや英語授業に関する本質的な理解について、形式による大きな差異は見られないことが観察できた。また、地区や立場（専科教員（英語）や経験年数等）を同一の協議グループに含めることで、専科教員は学級担任から子供の学びに寄与する背景や姿の捉え方を学び、学級担任は専科教員から英語指導に関する具体的な指導法を学んだという記述が多くみられた。加えて、推薦や悉皆によらず、本人の希望による参加者は、実践の中で見られた課題と研修内容を関連付け、主体的に授業改善に生かす姿勢が顕著であった。これらの結果から、集合型及びオンライン研修において、その特色を踏まえた、参加者の学びが充実する研修の在り方を考察するとともに、英語教育を窓口として、学び続ける教員に必要な資質について分析を進める。

第1室(3)

SNS X

若手教員の授業リフレクション研究

本波 詩菜（富山大学大学院生）・岡崎 浩幸（富山大学）

研究の目的

本研究では、第一筆者が授業後に生徒の姿から彼らの思いや考えに寄り添い、自己リフレクションを行った。リフレクションを深めていくことによって授業改善につながるのか、さらに自己と向き合うことにより、授業観はどう変容していくのかを明らかにする。

研究方法

12回の授業を実施し、筆者と生徒の思いが一致しなかった点、印象的だった点に焦点を当て、日誌を12回書き、リフレクションを行った。リフレクションの際にはRodgers（2002）がジョン・デューイの学びの資源としての経験理論を理解して作成した4段階モデルに基づいて、玉井（2019）が提案したリフレクティブ・プラクティスの循環モデルを参考にした。また、コルトハーヘンの「8つの問い」を基に、筆者と生徒双方が①何をしたのか、②何を考えていたのか、③どう感じていたのか、④何を望んでいたのかということに着目した。

第二筆者は、第一筆者の日誌に書かれたリフレクションについて循環モデルや「8つの問い」に沿うように質問や確認を行った。改善案等は示さないように留意した。

12回のリフレクションについて内容分析を行った。内容を意味のまとまり毎に切片化し、見出しを付けて分析した。

結果・考察

上記の方法により授業を振り返ることで、生徒の思いを読み取ろうとする意識が生まれ、彼らの言動に視線を向けるようになった。そして、生徒の思いを推し量り少しずつ改善を加えることで、生徒の様子や反応が意図した成果となって表れた。さらに、リフレクションをする際になぜそのような対応を筆者が取ったのか、自己と向き合うことで筆者の願いや焦り、不安があったことも明らかになった。失敗を恐れていた筆者が自己と向き合い、リフレクションを継続した。そ

の結果、授業においてうまくいかないことがあるのは当たり前のことであり、次にどう改善していくのかをその場で考え、視点を絞って改めて取り組もうとする前向きな変化が見られるようになった。

第1室(4)

英語教育における実践研究共有コミュニティの実践

南 侑樹（神戸市立工業高等専門学校）・永倉 由里（常葉大学）

本発表は、JSPS 科研費 JP20K02833 「英語教師の成長を促す実践共有コミュニティ構築プロセスの解明」におけるプロジェクトの一環として、半年間（全6回）行われた「実践研究連続講座」についての実践報告である。発表内では、連続講座開催の背景、講座内容、講座に参加した実践者およびメンターの声を報告する。土台となる理論として、省察的实践（Schön, 1983）が用いられた。省察的实践は教師が実践を振り返り、自身の実践の理解と改善を図る行為であり、教師の成長を促すとされている。また、省察的实践は個人のみならず協働の場で援用されることが期待されている（三品, 2017；田中・南・高木, 2022）。しかし多くの教育現場では従来型の授業研究や校内研修が踏襲されており、参加教師が消極的になる傾向にあるために、授業研究や校内研修が形式的開催につながっているとの指摘がある（高木・田中, 2021）。

そこでプロジェクトメンバーは本連続講座の開催にあたり、実践者が自身の関心や課題意識から立ち上がったテーマに基づき、実践研究に取り組んでもらうための「実践コミュニティ（Lave & Wenger, 1991）」を立ち上げた。コミュニティの参加者は実践者（小・中・高教員）9名とメンター（プロジェクトメンバー）7名である。より良いとされる肯定的でフラット・対等な関係性のあるコミュニティ形成（永倉・藤田・南, 2022）を目指し、実践者は実践研究に関する知識を深めながら、背景・関心・課題を共有し、他の実践者やメンターと協働して実践研究を進めた。本実践では、最終的に実践者が自身の実践研究を公開で発表した。その過程で実践者は教育観・学習観を捉え直し、自律的に自身の教育実践の理解と改善に取り組むことができ、成長につながる省察の在り方を実際に体験することができた。このことから実践研究共有コミュニティにより省察的实践が深まり、学習者理解が進むなどの気づきがあり、その後の実践者の教育活動への意欲が増す可能性がある。